

ホイリゲ

ウィーンでの生活とワインとを切り離して考えるのは、なかなか難しい。ワインは音楽と並んでウィーンっ子の「人生の悩み」を忘れさせてくれるための重要な小道具のひとつである。

そもそもウィーンっ子のメンタ



どの店にもかかっている松のトレードマーク



ホイリゲにて、日本からのお客様と



郊外の葡萄ばたけ

リテイーには、その昔マリア・レジアとかマリー・アントワネットの時代から、現実から逃避し、享楽を愛し、その場その場をエレガントな言い逃れでしのいできた歴史と血統とを受け継いできたのでは、と思われる節がある。

聖母マリアを崇拜し、信奉する人々が多いのもそのためではないか、などといううがった説まで存在する始末だ。つまり、多少の罪を犯しても、それが浮気程度の些細なものならば、その罪を事後マリア様の前で正直に懺悔しさえすれば、偉大なる母の心を持った聖

母は、その哀れな迷える小羊を許して下さらないはずがない、というのである。

息子のイエス様は赦しそうだけれども、聖母マリア様はとつても優しそう、というのが人気の集まるゆえんである。

モーツアルトのオペラでもヨハン・シュトラウスのオペレッタでも、誘惑・浮気・失恋などに始まる男女間の機微は恰好の題材となっている。生まれつきストイックな事はあまり好かず、いやな事があってもワインを飲んで歌を歌って忘れてしまおう、というのがそ



天気の良い日にホイリゲの庭でワインを飲むのは最高の気分

のモットーだろうか。

ワインは改めて述べるまでもなく、葡萄の絞り汁をベースに醸造されるアルコール飲料だ。葡萄は毎年育つから、当然ワインも毎年新しいものができる。この毎年最新のワインを振舞ってくれる居酒屋を、ウイーンでは「ホイリゲ」と呼んでいる。「ホイリゲ」とは日本語では「今年の」という意味になる。市の北部に位置するグリーンツィングなどをはじめとする地区にはホイリゲが密集しており、ウイーンを訪れる観光客が必ず一回は足を運び、フレッシュなワインを楽しむ場所である。

最近ではグリーンツィングのみ観光地としてあまりに有名になりすぎてしまい、地元の人々は観光団体の群がるこの地区の店は、特に夏のあいだは避けて通る。ここ以外にもホイリゲが集まっている地区はたくさんあるのだ。

ホイリゲの歴史は古い。ワインの歴史と同じだけの伝統を持つともいえるだろう。

今でこそウイーンも大きくなり、この居酒屋の集まっている地区も市内の一部となってしまったが、モーツァルトやシューベルト、そしてベートーヴェンが生きていた頃、このあたりは一面の葡萄畑で、ピクニックなどに最適な憩い



こじんまりとした普通の住宅の裏庭にもホイリゲはある

の場所として、市民に愛されていた。

19世紀なかばにはウィーンの周辺に1200ヘクタールもの葡萄畑があった。ソーセージやチーズ、それに黒パンのお弁当を携えて散策を楽しみ、飲み物はその居酒屋自家製のワインをふるまってもらう、というのがオーソドックスな遠足の形だった。

このシステムは現在でも残されており、普通の店ではワインこそダイアンドルという民族衣装を着たウエイトレスが運んできてくれるが、食べ物カウンターに自分で買っていくセルフサービス方式が多い。食べ物持ち込みでも一向に構わない。

ワインは注文すると4分の1リットル入りのジョッキで運ばれてくる。最初は「えっ、こんなにー？」と思うが、のど越しが快く、多少いける口の人であれば2杯、3杯とするする飲めってしまうだろう。

大きな店にはウィーンの民謡を歌ってくれるバンドが入っている。バンドとはいってもヴァイオリン、ギター、そしてアコーディオン程度の楽器を奏でながら歌を歌う、といった小編成のもの。ウィーンの音楽の歴史の一面を担う、独特かつ郷愁を誘うノスタルジックな響きがある。